うふうに、どこに居住するか、それを教えてほしい。ご家族はどうするのか教えてほしい」と。なので、「もし、学校がそういう分教室っていうかたちができたらば、そういうかたちでそちらで働いてもらうようになるかもしれないので」っていう話を一人一人とさせていただいた。七十何名。まだガソリンもないし、もちろん新幹線もない時期に、みんなよく集まってくれました。

・もともとは、東洋学園の子どもたちは、しばらく田村にいるので、あぶくま養護学校っていうところの一室、広い自立活動室っていうのを借りて、そこでやろうということで県のほうともやり取りをして、ある程度の了解はもらって、相手先の校長にも了解をもらって、それで行こうかっていう話まではしていた。でも、突然、降って湧いたように千葉に行っちゃったので、どうしようかと。それで、二十何人、卒業生も含めて行きましたので。だから、実際、籍のある子は27名。

その頃、千葉県のほうから県の教育委員会には、「東洋学園を利用していた子どもさんの転校手続きはどうされるんですか」っていう連絡は入っていた。だから、私たちに連絡が来るよりも先に、千葉県の教育委員会はわかっていた。そういう何かちょっと複雑なところがあって、いろんな事情があって千葉県には行かれたんです。

そこで10カ月、子どもたちは、今年の1月18日に戻ってくるまでずっと千葉県でお世話になっていたわけです。それも、安房特別支援学校って千葉県にあるんですけど、そこの分教室っていうかたちで、本校から教務主任クラスだったり、コーディネーターの方だったり、あと、講師を何人か採用して、うちの子どもたちのための教室を立ち上げてくれた。(鴨川市立) 江見中学校っていう中学校の廃校になったところを少し改築して。フラットにしたりとかしてやってくれて、午前中は小・中学部、午後は高等部っていうことで、午前と午後に分かれて10カ月面倒を見てもらったということで、学園の補佐をやってきたんですね。なので、そのお子さん方の様子は、あとで5月に県の人と一緒に行って、「お世話になっています」っていうことで千葉県にも行ったり、いろいろ県庁に行ったりして話はしてきました。

当初は、ほんとに先生方がどこに落ち着いて、子どもたちも親さんもどこら辺に落ち着いて、そっから通える学校はどこかなとか、そういう調整をずっと3月25日以降はさせてもらっていたという。

・それでも、また、刻々避難先が変わっていったり、県内だけじゃなくて県外とのやり取りも同時にやっていて、その窓口は教頭先生お一人と。私もたまにはやりますけど、ほとんどが教頭先生で。県外のほうは、区域外就学っていうことで、普通のやり方じゃなくて、簡単な名簿に書いて、「じゃあ、いいですよ」ってどんどんと受け入れてくれたんです。東京都か千葉とか。「正式なものはあとでいいですから」って言われてやっていたんですけど、福島県が、こういう災害があった県なのになかなか。要は、学園の子どもたちがいつ戻ってきてもいいように、県外に避難した子どもたちもいつ戻ってきてもいいように、学校が再開したら、すぐそこで授業できるように、職員はそのままの数ということでやっ

てもらえたので、七十何人残ったんです。それがなかったら、今頃、本当にみんな路頭に迷っていたと思いますけど。

そういう管理のほうと先生方のやり取りのほうは、うまく話ができました。指導班のほうとはうまくできない。指導班のほうは、何かよくわかっていないんですね。状況自体がのみ込めないっていうか。一番大事なところなんですけど。

・もしかして、高校とか、小・中のほうの高校のサテライトと一緒くたにされる可能性が非常にあったんですね。サテライトは、もともとある学校が、いろんな学校をお借りして同じ教育課程をやろうとしているわけなので、本当にサテライト校については、そこの（福島県立）富岡高（等学）校なら富岡高校の教員が、（福島県立）光南高（等学）校だったり、（福島県立）北高（等学）校だったり、あと、（福島県立）猪苗代（高等学校）だったり、あとこちらのほうで四つに分かれて、あと、神奈川のほうに分かれて、教員が実際に指導に当たるっていうことでやっていたので。そもそも分教室の場合は、うちは知的だったので、ここに転校して分教室で……。高校のように教育課程が違うからって、完全にうちの学校の先生が必ず教えなくちゃいけないっていうわけではなくて、そこに行ったらば、同じ教室の中で一緒に学んだうえで先生が付いているっていうふうなかたちで、柔軟な対応を取るっていうのが分教室というふうなかたちでやってもらうことによって、向こうの学校の先生方にも見てもらいながら、また、われわれの教員も見てもらって一緒に学ぶっていうような、ある面でそういう弾力的な、柔軟な対応をお願いしていたようなところがあるのかなと。それが、だんだん時間がたつにつれて、サテライトと同様にしなさいっていうかたちで、すべてサテライトのやり方に従ってやらざるを得ないような状況になってしまったっていうのが、何とも歯がゆい。

・やっぱり体調を崩すお子さんもいらっしゃいましたし、二学期が始まって10月ぐらいになっても、やっぱり地震があれば、「怖い」、あとは、フラッシュバック的なことで、「前の富岡のほうの担任の先生がいなくなると探す、きょろきょろするっていうふうな状況が見られた」っていうことの話がありました。

あとは、うちに帰って、子どもたちが、何か事あるごとに、「双葉のおうちに帰る」とか、「双葉のおうちに着いたら」っていうふうなことを言ったり、あとは、うんちを擦り付けるような行動が多い。子ども返りじゃないですけど、前の行動が出てきたりっていうこともちろんあったりはありました。

・通学の面では、やはり分教室っていうかたちを取っていただいて、すごくよかったなと。4月の14日っていうすごい早い段階でそういう態勢を敷いていただいたので、やっぱり障害を持つお子さんがいる家庭ではすごく助かっただろうと思うし、どこに誰がいるっていうのが、そこで大体確定したので、それから学童はどうするとか、あと、じゃあ、何時から何時まではどこに預けるとかって、そういうのも全部話し合いが進んだので、その点ではよかったと思っています。

・1日でも早く普通の学校生活を取り戻してやりたいっていうのと、避難所生活が長いと、

冷たいものとかばっかり食べて、学校給食を食わせたい。その一心がすごくありましたから。ほんとにあったかいものを食べるっていうことがどれだけ有難いかを自分として実感していますので、子どもたちだって当然だろうと。

そういう学校給食ができるところに1日でも早く行って、避難所だけじゃなくて、遊んできたりとか、先生と話ができるだけでもいいし、あとは先生方が避難所から来られなければ、自分たちが出向いて、訪問みたいなかたちで1時間なり2時間やってきてもいいと。最初はそういう発想で分教室って作ったので、いろんな形態があっていいんだ、今は何をやってもいいんだということで、それでやってもらったので。

7）災害への備え

・「備蓄しろ」とか、「いろんなことをどうしていますか」とかって言うんですけど。あと、「災害があったときに、防空頭巾は危ないのでヘルメット」、じゃあ、そのヘルメット代はどっから出るのっていうことで、結局、義援金でこういうヘルメットを。

・水も準備してあります。

・医療的ケアの発電機ですね、発電。一番医ケアで困っていたお子さんについては、本当に病院とかなんかにも行けなくて。一番困ったのは、酸素吸入するときの発電機がないんだということで困ったということで、それは何か、県でそろえてくれるはずだっていうことだったんですけど、一向にどこにも来ていない。

（福島県立）平養護学校では、新潟から補助してもらって、そして2台かな、あるって聞きました。それも義援金で発電機っていうか、ガスで、プロパンガスでできる発電機を買って学校に置いてあります。いざというときのために。

なので、震災から1年8カ月ぐらいたってこういう状況になっているわけですけど、予算化とか、そういうことについては、われわれが自分で動いていかないとなかなか集まっていかないっていうか、そろえられないかなと思います。

・今回つくづく感じたのは、「特別支援学校を福祉的避難所として開放してほしいんだ」っていう声があったんです。ただ、ある面で、避難所経営っていうのは、学校の教員がやることではないんですよね。3日はとにかく何とかやりましょうと。災害対策本部を立ち上げて、そこに応援して来てくれるまでの3日間のための備蓄なんですね。

そのあとの運営等については災対のほうでやって、われわれも当然お手伝いとかはボランティアでできますけども、教員も生活があってお子さんもいるわけですから、学校の先生がそれをやるのは当たり前でしょうっていうふうになってくると、特別支援学校として、じゃあ、どうなのかなっていう、そういう矛盾があります。

・逆に、地域にこういう子どもさんがいて、いざというときには、夜とか、とにかく外に出たら、「あ、あの子がいた」って、周りで認識してもらえるような、そういう地域にわかってもらえるような対策を取っていくほうが、むしろ、賢明じゃないかっていう話はされています。

それは、地震とか、何かのときはそうですけど、原発は、それは関係ないです。同じ地域の方ですら、会津の避難所に行って、うちの子どもたちが、「うるさい」って言われて、「黙っていろ」とかって怒鳴られるわけですね。それを毎日のようにおじいちゃんとかが……。

聞くと、会津に分教室があって、そこに巡回で行って、たまたま迎えに来ていると、1時間も2時間も、「同じ町民なのに何であんなことで俺ら怒られんだ」って、もう何十回も繰り返し言って泣いています。それが、こういう大災害の場合の現実です。

自分のことで精いっぱいなんです、手いっぱいなんです。人のことなんか考えている余裕がないっていうか、それが、多分あったんじゃないかと思います。

9）教員の疲労

・子どものケアっていうのは、いろんなとこからだんだんと手を差し伸べられていったんですけども、校長先生、教頭先生、みんな、先生方を含めて、先生方へのケアっていうのがゼロだったんです。だから、例えば、校長先生に、これはどうなるんだ、これはどうなのって仕事の話が行くんですけども、やっぱりサポートっていうか、子どもの気持ち……。私は、あぶくまで取るものも取りあえずだったんですけども、若い先生は、やっぱり帰って……。仮設にいた先生もいらっしゃいますし、借り上げのアパートにいる先生もですけども、うちに帰ってきてみれば…。

だから、家族がいればいいっていうわけでもないんですけれども、仕事をやって帰ってほっとしたときにとか、そういうところとかにサポートできればっていうことをずっと考えながら、どっかで糸が切れないかなっていう気持ちでいたんですけれども。

たまに校長先生とか教頭先生に来ていただいて話を聞いていただいたり。だから、両方ちょっと…。校長先生とか教頭先生にも息抜きしていただきたいんですけども、うちも僕がやろうとしてはいたんですけども……。

・先生方もお互いに支え合うっていう部分はすごく大事で、ほんとに一生懸命頑張ったんだけど、やっと借り上げの住宅に、アパートに入って、やっと落ち着いて、一時帰宅で自分のうちから思い出の写真を持ってきて、「これは大事だから下に置こう」って言ったら、今度は、郡山が大雨でそこが浸水してしまって、写真まで泥だらけになって。それを水道で一枚一枚洗っているときから、突然心が折れちゃったんです。スプーン一つ買うのにも、もしこれを買ったら、またこれを使えなくなるんじゃないかと思い始めたら、いくら頑張ろうと思っても頑張れなくて、「もういいから休め」っていうことで3カ月休んだ先生もいらっしゃった。

・それが終わったあとで、1年間頑張ってよその学校に異動された先生も、ちょっとしたきっかけでしばらくお休みになった先生もいらっしゃいます。燃え尽きちゃった方と、ほんとに折れそうになるまで頑張って頑張って頑張ってきて、最後に卒業式で全部ピアノの演奏もやってくれて、ずっとバックミュージックっていうか、BGMを全部ピアノでやって

くれて、異動して、いよいよだっていうときに折れちゃったんですね。今は元気にやっていますけども。

だから、あえてそういう方を今励ましてもしょうがないので、少し落ち着くまで時間をかけたほうがいいかなっていうことで、相手方の校長さんとも、「今、どうしていますか」っていう話をしながらやっていたというか。

・先生方は、多分、心の傷というんですか、つらい思いというか、ストレスはあとになってから出てきているっていうのは、実感として感じます。その当時は、多少のストレスがあっても結構はねのけてね。

・だから、そういう点では、そこのとき頑張りましたっていう先生もすごくいいんですけど、そのときできなかったっていうふうにすごく悔んでいる先生も中にはいて、そのケアっていうのもやはりなかなか難しいところはあるんだろうなと。今でもずっとそれを引きずって…。だけど、やっぱりみんな協力してやっていきましょうという、そういうところではつながっているところではあるんですけどね。

10）再建への努力

・先生方には、とにかくここに入って、最初に言ったのは、「どんな知らない人でもいいから、朝とか帰りに顔を合わせたら、おはようございますとか、こんにちはとかってやって」って。「挨拶をやって。頭下げることから始まるんだ。そこからだ」と。

これが、障害のある方々だったら、地域の中で、町内でとか、班とかあると思いますけど、頭を下げるってどんなに大変なことかっていうのがわかると思うんですよね。ただ、ここに来て、校長の立場もありますけど、とにかく挨拶しないとだめだと思ってやっていましたけども、保護者さんは、「できればそういうことまでして」って、「だったら自分で」っていうふうに思っちゃわないかななんて。面倒臭いですよね、気持ちが、思いっていうとか。そういうところが結構大変かなと思いますね。それはありますね。

・知ってもらう努力をしないといけないので。あとはもう、今度、学級編成とか、具体的な高校入試とかって始まってくると、今後どうなるんだって、やっぱり県のほうでは心配なので、「入ってくる子はいないのか」とかっていろいろ来るんですけど、「ここは仮設です。私は、自信を持って、ここですばらしい教育がなんて、そんなおこがましいことは言えない。ただ、入ってくる子どもには責任を持って、高校生だったら3年間はここで学ばせたいとは言えっけど、これからどうなるって話は一切できないでしょう」と。

それが、小学生、一年生が入ってきて、途中でまた別な学校に転校なんてなったらかわいそうじゃないか。そういう思いがあるので、早く方向性を決めてほしい。建てる建てないは別でいいから。そっちの道しるべをまず出してもらって、それからでないとわれわれは進めないよっていうふうに思うんですね。今の大きな課題はそこですね。仮設ができての課題。

11. 福島・相馬市／発達障害児者をもつ保護者

ヒアリング実施日：2012年8月31日
参加者：6名
子どもの障害種別：知的障害
子どもの年齢：学齢～成人

概要

震災後、津波被害により避難した発達障害児者をもつ家族6名にグループヒアリングを行った。地震後の津波からの避難状況、その後の避難生活に至るまでを時系列的に話してもらった。

震災直後の障害児者の避難所での生活の問題は深刻である。支援物資が十分でない中、原発事故の問題も加わり、食品や医療の支援が入りにくい環境となった。現在も続く仮設住宅や津波により損壊した家での生活の様子からも、事態の深刻さは明らかである。現在も続く仮設住宅での生活は、音が筒抜けであることの問題から、本人と家族がストレスにさらされ、問題となる行動が高まるという悪循環が生じていた。

これらを踏まえて、希望する支援については、薬、避難スペースの確保、避難訓練の方法など、被災体験を振り返っての提案をいただいた。

1）地震、津波からの避難

・学校に迎えに行って、まだ子供たちが教室から出て来ないうちに、すごい揺れが来たので、先生は生徒たちを離さず、「ここにいて（学校）」「めいめいに連れていかないで」って、そうして、無事に、助けていただいた。

・最初の避難所の学校に朝までいたのです。避難所の周りが津波で浸水してしまったため、ほかの人は次の避難所に移動して、朝には誰もいなくなっていました。気づかずに、その学校の先生に「どうしたのですか、みんなは」って言ったら、「声を掛けられなかったのか」って言われて。次の避難所に行ったら「いっぱいですから、○○に行ってください」って言われて、そちらに行きました。

・私はちょうど地震のときは、船の仕事をやっていたのです。自宅近くの倉庫で仕事をしていたときに地震になったもので、家にいた90過ぎの祖父母が心配でした。火発の煙がいつも出ていないのに、真っ黒い煙が出たんですよ、煙突から。ですから、息子と二人で、「うわあ、火発（火力発電所）が爆発する」って。家が火発近くなものだから、家に行ったら、そのとき、じいちゃんが、テレビをつけて「うわあ、津波」って見てたけど、まさか津波が来るとは思わなかったんですよ。ばあちゃんは、うちにいられなくて

震えて、外にいて。そしたら、車の窓から顔を出して、「何してんだ、津波、来っから逃げろ」って言われた。

・私も、市場で仕事をしていて、帰るのが1時過ぎたんですよ。帰って、体が生臭いのでお風呂に入って出て、理髪店に行って頭を洗っているうちにすごい揺れが来ちゃって、シャンプーだらけの頭で。家が心配だったが、帰ったけど、道路があちこちの屋根の瓦が落ちている、ガラスが壊れている、でも、「うちに帰らなくちゃいけない」っていう気持ちで、必死だった。やっぱし、うちも瓦が落ちて、ガラス張りの壁になっていたので、それもなんか耐えきれずに壊れていて、庭に入ることができなくて。近所の人たちが、みんな、「なんか津波来るって言ってるから、逃げないと駄目だよ」って言われて。

・旦那も帰って来たから、みんなで一応逃げたんですよ。でも、「来ないよね、来ないよね」って言って。そしたら、第1波が来ていたんですよ、もう近くまで。海の方を見たら、もう、海の近くの家が、屋根を吹っ飛ばされてきているのを見えたんですよ。両脇猛波、自分のうちも流される、車も流される、どんどん奥にいろんな流れてくる、それを見ながら腰を抜かして、転び転び、5回くらい転んで、高台に上がって行ったんですよ。旦那もぎりぎり。

・家の子は、施設にいたの。中学3年生、卒業式だったのね。

「うわあ、地震だなあ」なんて言って、なんにも構わないんだ、もう。ほら、こいつの上のおねえちゃん亡くなってるから、仏壇だけは押さえた。そのとき、仏壇を押さえて、そのときは、まだ、もう、水槽は壊れて駄目だったし、テレビは倒れる、サイドボードの椅子は仏壇が倒れないようにって。それで、ずいぶんいたんだけども、今度、重さで落下した。そうして、今度は、「津波、来るぞ」って言うわけな。取りあえず、なんにも構わないで、実印だの、そういう空通帳とか実印とか登記証だの、それを持って道を。逃げたの。

・うちは、結構、高台にあるんですけど、こうやってのぞいたら、滝のように水が来て、私も娘もうちのなかにいましたし、おばあさんは庭でこうやって見ていたのです。あっという間に、うちのなかに水が入ってきて、タンスが倒れて、取りあえず、私と娘は、「タンスの上に上がれ」って、タンスの上に乗ったのです。それでも水くぐってきて。結構、本人も怖い思いをしていて。

・家に息子といて、地震が来て、結構、古い木造の家だったんですよね、揺れがだんだん激しくなってきて、木のきしみがどんどん揺れるんですね、ビシビシッという音が。それを聞いて、もう子どもを抱きかかえて、大黒柱のところに、こうガッとつかんだりした。そうしたら、後ろのほうで、バキバキッと、屋根が落ちていく音が、結構、ひどい音が聞こえてきて。「あっ、落ちそうになったな」って見たら、もうそこら辺、ガチャガチャで、瓦は全部、屋根は落ちているし、なんか大黒柱のある部屋だけが無事だったのです。ここは大丈夫だからってことで、ほかのところの電気の線とか水道のあれを全部ふさいで、その部屋だけ電気と水道を通して、しばらくはそこで生活をしていたので

す。

・気を遣う。本当に、だって、「静かにしなさい」って言っても理解できないし、「今、夜中だよ」って言っても、やっぱり、自分にこもっているんですよ、自分の世界に。だから、話も聞かないし、ストレスがたまって、今度は物に当たったり、私に当たるの。「今日は、お父さんいないんだべ？」って言って、私に八つ当たりするの、いつも。わかっていてやっているの。少しでも、「シーッ」なんて言うと怒るのよ。「うるせえ」「くそばああ」なんて言われる。

・「帰る」って言って、自分の、ずっともとの場所だったら、一人で通っていたからわかるんですけど。ちょこちょこ、居場所が変わったじゃないですか、いられなくて。だからパニックになって、いなくなってしまった。それで、捜索願を出したんですよ、警察に。見つかったのが夜の9時半。真っ暗だし、ドブに転び転び行ったと思うのね。

2）避難所から仮設へ

・最初は、別に家を探そうと思って、そこにいたんですけど、市役所の人が、「これは、大規模半壊のあれに入るよ」というふうに教えてくれて、それを、市役所のほうに申請して、「どうなるんですか」って、「仮設に入ってください」って言われて、それで、仮設を応募して。

・親戚の人が一戸建てを借りたところに、住ませてもらったんですけど、誰かに「なんか、住んでない人が住んでいる」って、誰か密告したみたいで、そこにもいられなくなっちゃって、今度、どうすることもできなくて、私の実のおばが、ちょうど、相馬市内にいたものですから、そこに、ずっと仮設ができるまでお世話に、1か月以上、5月10日までお世話になったのです。もう、どうしてもみんなの方（避難所）にいられなくて、みんな、キョロキョロ見るじゃないですか、指をさしたり、なんとかして。大声を出した時は、みんな集まってきて、夜中でもみんなに囲まれて、私、嫌で、かわいそうで、外に逃げたんですけど、外まで追っかけて見にきた人がいたんですよ。もうこれじゃ、本人かわいそうだって。

3）仮設住宅での生活

・家の仮設は3棟あって、3棟の真ん中。息子は独り言がすごくて、板1枚なんで、隣に聞こえる。夜寝られないと、ちょっと独り言が大きくなってきて。それで何度も、私、夜中に車に乗せて、歩いて、朝方うちに帰るということがあるんですよ。

・障害者だけの仮設というか、「周りに気を遣うことがない」というのをテレビで見て、「あれはいいな」と思って。「本当にそんなのがあったらいいな、みんなに気を遣うことがなくてな」って。「静かにして」って言うと、怒って、ドカンとたたいたりして、どうかして、私、どうしてもいられなくて、3日ぐらい前も、車に乗せて、ずっと朝まで、ずっとグルグル歩く。状況が理解できなくて、「家を壊して」とかって、怒ったり。

・仮設で困っていることは、やっぱり遊ぶところがないので。砂利なので、バランスが悪いのですよ。普通に歩いていても転ぶくらいなので、そういうところで走らせると、すぐ転ぶ。なので、やっぱり、運動できる場所っていうのがほしい。

4）医療的ニーズ

・薬、てんかん持ちなのです。それで、薬もみんな流されちゃって、なんにもなくて、一晩は利用している福祉施設でお世話になったのです。うちの子どもがぜんそくも持っていて、てんかんも持っていて、てんかんの薬、1回でも飲まないとてんかん起こしちゃうんですよ。そしたら、そのうち、ぜんそくは起きる、てんかんは起きる、次の日に連れてきてもらったときですね。下の子が、じゃあ病院、今日だけやっているということで、12日の日、行って薬をもらってきたんですけど、それでもなんか自分に納得、理解できなくて、みんなゴチャゴチャいるところにいられなくて、困って、受付の人に言ったら、「じゃあ、2階も少しはいるけど、2階がいいんじゃないか」ということで、2階に行ったんですけど。

うちの子どもちょっと、独り言がすごくて、周りに迷惑をかけるということで、ちょっと下のほうに行ったら、興奮して、みんなにこう見られて、囲まれて、それが嫌で、今度、少し興奮して、私なんか、顔を殴られちゃって、鼻血も出ちゃって、どうすることも。そうなったのが、何日か過ぎてからなんですけど、3～4日、1週間いたかな。それでどうしてもいられなくなっちゃって、もうみんなに囲われちゃったんですよ。見られて興奮しちゃって、今度、外に連れていったら、外まで見にきたんですよ、追っかけて、見せ物みたいに。

・支援に来た先生方が良いこと言ってくれるんだけど、対応できないんだ。現地のみんなは混乱していて。その時にご助言をいただいても、こうすべきだよなと言っても、周りがそれを整備していけないんだよな。

・精神科のお医者さんからの薬は、みんな原町で処方されていたから、原町では、原発事故からの避難で、みんな行っちゃっていますよね、病院も。次の日どうにか、「午前中だったらいるかもしれない、出せるかもしれないから来てください」って言われて行ったんですけど、やっぱり足らない薬があって、2か月分、出してもらったんですけど、1週間分ぐらいしかないものもあって、それで困っちゃって。

・そうしたら、たまたま公立病院で、臨時で精神科がやってくれたもんですから、そこで、いただいたんです。

5）これまでの経験から希望する支援

・調剤薬局のほうで、大変だったと思います。どこか1カ所でもでもいいから、震災の時に、薬がもらえる薬局を確保してもらえばな。

・一番困ったのは、やっぱり、居場所がなかったということ。周りに適応できないんだな。

うちにいれば安定するんだけどね。避難所の中には、そういう方がいっぱいおりました。障害者が、1部屋でも、2〜3日でもなんでもいいから、確保してもらえると、ちょっと親たちも安心できる。ちょっと騒ぐと興奮して、どうしようもなくなるから。

・親同士もわかっているから、周りに気を遣うこともないですし。やっぱり、その場所が必要だと一番に思いました、本当に。

・津波が来ている時は、隣近所だな。そういうところを避難訓練に組み入れてもらうとか。そういうことは、やっぱり大事なんだなと思う。

12. 福島・大熊町からの避難者／発達障害児者をもつ保護者

ヒアリング実施日：2012年8月19日
参加者：6名
子どもの障害種別：知的障害、発達障害
子どもの年齢：学齢～成人

概要

震災後、原発事故により避難した発達障害児者をもつ家族6名にグループヒアリングを行った。震災直後の混乱した状況から、現在の避難生活に至るまでを自由に会話してもらった。情報の少なさや、障害児者に対する避難所での理解してもらえない状態が明らかとなった。また、医療に対する特有のニーズがみられた。

放射能不安を抱えた先の見えない仮設住宅での生活の様子は、不安とストレスで精神的健康を保つことが難しい状態であることが窺われた。こうした大人の変化は、子どもの日常生活や対人関係にも影響を与えていた。こうした放射能被害の不安と避難生活の記録は、今後の大規模震災に備えて整備していくべきことを示す資料として、大変重要なものであった。

1）発災から避難まで

・なんにも荷物を持ってきてないですよね。私は、バックはとりあえず主人が取りに行ってきてくれて、バックだけ持って。障害者がいるので、主人がワゴン車を取りに戻って避難しました。他の方はバスとかで避難して。私たちも「バスに乗ってください」って言われたんですよ。役場危なくて、あれは国が用意したのかな。バス十何台が来ましたよね。

・次の日に集団移動っていうことになったんですね。放送があって、町役場に集合って言われて。原発って言われなかったんですよね、あのときは。3月12日に「あれに乗ってってください」って言われたんだけど、絶対それは無理だろうってことで、自家用車、ワゴン車で三春の体育館に一応行きましたね。

・震災したときは、自宅がうちは海から2kmないぐらいのとこなんですね。もう地震が来て、すぐ津波が来るっていわれたもんですから、何も持てなくて、もう本人も何も。ゲームだけは持っていったのかな（笑）。命より大事なゲームだけは持ってたんですけど、それが功を奏して避難所へ行ってもゲームできましたけども。私はバッグも持ってなかったんです。とりあえず逃げるのが精一杯で、町の総合スポーツセンターってとこに逃げて、そこからは。あのときは戻っちゃいけないって言われてたんですよ。

2) 避難所での様子

・1泊だけだったんですけど、すごく長く感じて、やっぱりすぐ走っていっちゃったりとか、周りの人がなんだろうみたいに、ちょっと一見、見た目が普通なので、他の人にはわかってもらえなくて、なんかしつけのなってない子どもだなみたいに思われてるのかななんていうところがありますが。

・残された人はもうずっとパン1枚、1切れみたいな。なんか違うよねっていう感じ。あと、なんだろう。並んでるときに、「大熊町の人だけ」って言われて。ほかの人もいるのに。そう言われて、おばあちゃんたち戻っていくのね。
そんなのたべてもおいしくない。

・おにぎりがかっちんかっちん。消化していかない。食パンは賞味期限切れ。

・靴下も1週間、10日。下着も1週間、10日。10日お風呂入れなかったし。

・避難に格差。配給も、早くいった人がもらえる、少し遅れると、終了していた。弱者がダメ。

・体育館で、知的障害児の子とか、自閉症の子とか、じっとしているのが苦手な子とか、知り合いのお友だちにいたんですけど。理解してくれる人はいいけど、全然わからないおじいちゃんとか、おばあちゃんとか「うるさい、静かにしろ」。そういう声が私たちにやっぱり聞こえてきて、もっとなんか、わかってもらいたいなと思いましたね、やっぱり。私もやっぱりこういうところで寝てたんですけど、田村市の総合体育館に3週間いたんですけど、結局そういう子っていうのは、環境が変わるとやっぱりそういう奇声とか、眠れなくなったり、やっぱりじっとしてるのが苦手だから。でも親はなだめますね、「静かに、シー、シー、シー」って。親のほうはもう現実的にまいっちゃうんですよね。

・たぶん迷惑かけちゃいけないって思うから、やっぱりね。

・電気節約って言われて、一応ゲームを持ってきたんですが、控えてくださいみたいな感じで。そしたら子ども夜中でもなんでも「DS、DS」と言ってました。

・一番やっぱり苦手なのは静かにしててとか、ずっと長く座っててみたいなことが苦手なんですが、避難したときはやっぱりそういうことをずっとしてなくちゃいけなくて。1000人ぐらい、もっといたかな2000人ぐらい入る体育館にこんぐらいのスペース与えられて、そこにずっと……（涙）すいません、思い出して。駄目だ、なんか思い出して。

・私は3人を連れて、親も一緒に避難所で3泊して、それから関東の弟の家に避難。弟のお嫁さんは実家に帰ってくれて、私たちがそのアパートを占拠しちゃったんですね。そこに半月いたんだけど、半月経った頃にようやく、もうそろそろ出ないと、お嫁さんにも悪いし、もうどうしようって言ってるときに役場が会津になるっていうふうに聞いたんで。で、会津のホテルに行って、ホテルで待機っていうふうに皆さんするんですけど、うちはやっぱり、そう皆さんと一緒にいれないっていうふうに主人も思ってたんで、すぐアパートを借りて、会津に落ち着いたんです。

・初めて会うちょっと遠い親戚のところに1泊させてもらって、そのあとは西会津町っていうところの体育館にいたんですけど。そこは、こじんまりしてて、体育館は広かったんですけど、こじんまりしてるところに70～80人しかいなかったので。すごく親身にしてくれて、「必要なものはありますか」みたいな感じで、おもちゃを用意してもらったり、絵本を用意してもらったり、すごく子どもにとってはいい環境を与えてもらって。そういうふうに「何か必要なものありますか」って聞いてもらうと、こんなものというのが言えました。そこで、もう3週間ぐらいお世話になって、そのあとは旅館とか、あとはだんだん環境もよくなってきて、本人も落ち着いて過ごしているっていう感じで、今は、またなんとなく落ち着いて前と同じような状態にはなっているのかなとは思うんですけども。
・避難してるときにはいじめられました。これはほんとにすごかったですよ。どうしてもうちの子どもは騒いだり、奇声を発したりするので。ずっと親子3人でいて、どうしてもストレスを発散する場所がないんですよね。
・うちの子が、避難所にあった広辞苑をずーっと見たんです。そうしたら、お年寄りが「なんでお前が見てるんだ」って、取り返されたんです。そのお年寄りが見るわけじゃないんですよ。ストレスがたまる。
・やっぱり一番最初の広い体育館にこじんまりとスペースを与えられたときに、動けないので、子どもが騒いでたりしたときが一番つらかった。
・避難になってパニックになるかなと思ってたんですけど、それがないんですよね、不思議なぐらい。全然うちは落ち着いて。すごいこだわりとか強かったんですけど、なんでか知らない。それが親も不思議なぐらい落ち着いてて、パニックもなかったし。体育館で一応、一晩過ごそうかと思ったんですけど、うちはちょっと身体が不自由な家族もいたので、体育館で毛布1枚敷い寝るのは無理だろうっていうことで、他県にいる姉を頼り、12日夜8時頃に避難して、そこで1か月ぐらい暮らしました。

3）仮設住宅での生活

・なんかやっぱり私は仮設住宅なんですね。どうしても今夏休みなんですけど、こういう住まいの問題って、学校がないと、子ども同士のコミュニケーションというか遊ぶ場がないんですよ。だから、久しぶりに子ども同士とコミュニケーションをとって、話して、いろいろゲームでもなんでもいいんですけど、子ども同士で遊んだ姿を見て、なんかすごく幸せだなって感じて。
・やっぱり障害があるから、仮設にはやっぱり入りづらいって思っちゃうし、ご迷惑かけるのかなっていうのもあるし。こっちがどうなのわかんないですけど、やっぱり借り上げに、アパートに自分たちで住んだほうが、精神的には楽なんですよね。ただ、情報が入りにくくなる
・住環境。仮設が狭くて、音も聞こえる。長屋みたいにすべてつながっている。台所も狭

い。仮設も、後から出来たものは良い。冬は寒いし、夏は暑い。格差がある。当たり外れがある。

・避難で、旅館でも格差ができるのに、また仮設でも格差が。「どこまで格差ができればいいの？」みたいに感じてしまう。

・もう入った当時は大変だったんですけども、あの通り今のところは落ち着いているんで、こうなって全然もう手はかからないです、今のところは。

・仮設で花火もできないんだよ。普通の生活をしたいんだよ。ごく普通の、特別なものは望まない。夏になったら親子で庭先で花火をやったり、友だちを呼んで花火をやったりとか、ああいう知人が集まって庭先でバーベキューをやるとか、そういう普通の生活が、今できないから。

・ちっちゃいプールを出して水浴びがしたい。仮設でプールは出せないもん。運動不足にもなる。

4）子育ての悩み

・今、一番上は中学校1年生で、前だったら双葉郡内から通える高校って探せばよかったのが、今は会津か、もしくはいわきに引っ越すかもしれない。そうすると、いわきの高校と、すごい範囲が広くなっちゃって、本人もたぶんいっぱい考えなきゃいけないし、選択する幅がすごく増えちゃってというのが、今、上の子は言いますね。

・病院だったり、歯医者だったり、床屋さんだったり、苦手なところ。床屋さんはまあ好きなんですけど、床屋さんのほうが逆に怖がっちゃうというか、「ちょっと切れない」って言われたりするんですが。そういう病院・歯医者というのは、本人は苦手で、やっと大熊にいるとき慣れたなと思ったら、今度は会津でまた探し直し。もしかしたら、いわきのほうに引っ越したら、またそこで。なんか、こういう子たちに、こういうところはありますよみたいな情報があるといい。

・下の子は本当にお友だちと遊ぶのとか大好きなんですけど、今はアパートなので、近所にいないんですよね。ちょっと遊びたいときに遊べない。

・発達障害の診断を受けた子ですが、学校へ行き渋っていて、ようやく保健室登校をして少し順調になってきたなっていうときに震災だったので、また行けなくって、引きこもりってまではいかないですけど、なかなか外に出るきっかけが少なくなってしまったなって…そういうところはかわいそうだなっていうふうに、今は思ってるんですけど。

・借り上げのアパートを見ると、お友だちのお家に行ってきたというのが、なかなかもう出来ないんですよね。行ってもやっぱり狭いところにいるので、そのお家に上がって一緒に遊ぶというのは、やっぱり相手にも気使うし、嫌がられるのはわかってるんで。そうすると、外でお金の使うような遊びになってしまったり。ゲームがあるようなところに行ってみたりとか、なんか遊び方が変わっちゃったななんていうのが。

・クラスの友達を仮設に呼べない。

5）医療的な問題

・はじめは、一般の薬でさえも不足の状態。
・薬を処方してもらえなかったため、服薬を自己判断により中断した。
・うちは子ども二人、夜だけ（歯科）矯正してたんですけど、その道具を置いてきました。いわきの病院だったんで、震災後は全然行ってないので、その後どうすればいいかよくわからない。お金かけて治してたんだけどね。一時帰宅で戻ったはいいけど、そういうものを持ってこられないじゃないですか。もちろん、とても口には入れられないよね。
・新しい医療機関を探すことが難しかった。大人にとっては良い病院でも、子どもとの相性は良くない場合もある。
・地元の人から情報を聞くことができなかった。時間の経過により、大熊町内の人から情報を得た。（口コミの情報のみ）
・薬は本当に、一般の方の薬はなかったですよ。
・薬は飲んでたんだけど、うちは、それを期にやめられました（服薬中の薬を処方してもらうことができなかったため、中断せざるを得なかった）。
・「あそこの病院がいいよ」とか、そういう情報は、あまり地元の方と親しく、そのときはしてなかったので、わかんなかったです。
大熊の人たちもいっぱい行き始めてるじゃないですか。その人たちから、「あそこがいいよ」っていうふうな情報が、やっぱり同じ町民からなんですけど。

6）避難中に役立ったこと

・医療マップみたいなのがいただけたので、どこにどの病院があるっていう、あれはとても助かりましたね。会津若松の医療マップっていうことで、耳鼻科合わせてとか、歯医者ここっていう、役に立ちました。
・養護学校に入ったので、進路や相談については、情報をもらえた。
・大熊町の保護者会で、毎月1回集まり、連絡先をこうかんしていたので、それらの情報網を使って、情報交換をおこなった。

13. 福島・C市/保健師

ヒアリング実施日:2012年10月5日
参加者:2名

概要

震災後、C市で災害対応、要援護者支援を行った2名の保健師にグループヒアリングを行った。震災直後の混乱した状況から、現在の要援護者支援に至るまでを自由に会話していただいた。原発事故で支援者や物資が少ない中で、できる限りの支援活動を実施していた。

放射能不安の中で子どもと母親が強いストレスを感じて子どもが十分な発達ができていない様子がうかがわれた。障害児を抱えた家庭は特に厳しい状況におかれていた。一方で、良好な支援を受けた障害児は特に大きなストレスを感じていないこともあり、福祉サービス継続の重要性がうかがわれる。住民が強いストレスのため、市職員に暴言を吐くなどの災害時特有の状況もあった。

現在は、福祉避難所の検討を進める中で、これらの課題を解決していこうとしている。

1）大地震直後の災害対応

A　3月11日はちょうど（乳幼児健康診査）10カ月児健診がありまして、地震があった時は健診の最中でした。しばらくは、揺れが収まるのを待っていましたが、なかなか収まらなかったため、赤ちゃんを抱っこした、お母さんと一緒にそのまま靴を履かずに外に出て、駐車場に避難しました。

B　私は、自立支援協議会の発達障がい者支援部会の事務局をやっていて。この部屋でやっていたんです。みんな保育所の先生だったり、幼稚園の先生だったり、福祉関係の方だったりするので、「とにかく職場にお戻りください」ということで戻っていただいて。あと、私のほうは、すぐに災害業務で炊き出し。ずっとおにぎりを握っていました。

A　保健センターが避難所になったので、職員でチームを組み3交代で避難所運営にあたりました。保健師が避難所を巡回するということになり、活動した初日に原発で爆発がありました。屋内退避になり、それまではいろんな団体からこちらに支援に来てくださるというような連絡が来ていましたが、もう入れないということで、「誰もここには支援に来られないらしい」ということになりました。

だんだん物資もなくなり、ガソリンもなくなりました。取り残される気分を味わいました。食糧や粉ミルク、紙おむつがない……。保健センターに行けば何とかなるんじゃない

かと、お子さんをお持ちの方が必然的に保健センターを訪れるようになりました。しかし、炊き出しは大人用の食事しかなく、離乳食などは用意できなく困りました。

B　全国の市町村に要介護者が避難していたんですよ。私もびっくりなんですけど、全国各地に自分で行っていた人が意外と多くて、全国の市町村の介護保険担当から、例えば認定の確認だったりとか。あとは、主治医意見書の閲覧だったりとか、厚生労働省のほうから介護保険の対応についての通知が入ったので、それをどういうふうに取り扱ったらいいのかとか、そういった問い合わせが全国の市町村だったり介護保険事業所から入って。

A　様々な理由で避難できなかった高齢者や障がい者の方の巡回訪問に、長崎大学の医療チームや、東京や横浜の消防の方、自衛隊の方など全国各地から来てくださった支援者が一緒に同行してくださいました。

保健師、医師、看護師、薬剤師、消防隊の方5人ぐらいで、1台の自衛隊車両に乗り巡回しました。緊急搬送が必要な場合にはわれわれが」ということで自衛隊の方がいってくださいました。

高齢者担当から名簿をいただき、地区を分けて、「A」「B」「C」「D」と四つぐらいの班に分かれて、それぞれ1日20軒ぐらい回っていましたね。

B　JDF（日本障害フォーラム）からボランティアの人が随分入って、市内にいる療育手帳と障害者手帳がある人を訪問していただきました。身障、知的、難病については、市が渡したデータをもとに回って歩いたと聞いています。精神は、やっぱりさすがに厳しいので、保健師が回って歩いた。

2）家庭の悩み

B　震災以降の健診は時間がかかるよね。

A　かかりますね。1.5倍ぐらいになったときもありますね。

B　心理士が3人入っているんですよ。1人はもともと市で頼んでいた発達のほうの相談をする人なんですが、2人の心理士は心のケアをやられている心理士なので、ちょっと心配のあるお母さんを面談してもらっているという。

仮設住宅の入居の決め方というのは優先順位があって、障害を持った方とか、高齢者とか、子どもを持つ世帯とかってあるんですが、そのコミュニティーを大事にしようと。まず、住んでいたコミュニティーを大事にしようというのがありました。

それで、自閉症のお子さんを持つお母さんからちょっとSOSがあって、どうしても自閉症のお子さんがドンドンしたり音を立てたりするので、隣から苦情が来てお母さんがとても困っているということで。お父さんは単身赴任で行って、お母さん1人で抱えて込んでいるような状態だったので、何とかどこか探してくれということで、私たちで仮設住宅の係に交渉して。隣の家とちょっと隙間があるいい仮設住宅がだんだんできてきたので、そこを探してくれて、そこに移ったという経過がありましたね。

あとは、津波の被害に遭って避難所に行った自閉症の親子だったんですけれども、その

お母さんのこだわりというのが、「子どもの宿題に時間がかかる」とか、あとは、「筆圧が強くて」とかなんですよ。それで、「お母さん、とりあえず、おうちが津波で流されて命が助かったんだから、まず、宿題のことは次にしましょう」みたいな、まずは安定できるようにしましょうという感じなんですけども、ずっと筆圧のことと、「消しゴムで消すのが強すぎて破れるんです」ということで相談されていました。

A　考えも広がらないのですごく狭いですし。「震災前はこうだった」、「震災前はこうだったのに」というところに戻ってしまうので。

B　1歳6カ月児健診では、震災以降、言葉が遅れている子が増えました。3歳児検診では、落ち着きがないとか、かんしゃくを起すとかっていう情緒面の問題がある子が増えています。

A　その市町村によって基準がまちまちなので、単純比較はできないんです。「C市は、この月齢なら、このぐらいまで成長してほしいな、発達してほしいな」という目安は震災前も今も変わっていないのですが、しゃべっているけど、こちらからの問いかけに応じてくれなかったり、意思疎通うまくいかなかったり、と「経過を見ていきましょうね」というお子さんが増えてきている印象です。

昨年度（平成23年度）、C市で健診を受けられたお子さんは4割ぐらいだと思います。避難したくてもできなかったとか、一旦避難をしたけれど向こうの環境になじめなくて、やっぱり戻ってこられたという方もおられます。

A　健診に来られた皆さんには、できるだけ心理士さんに相談してもらっています。

「お子さんの様子で気になるところはないですか」と声かけしたり、アンケートに記入いただいた中で「震災後、大きい物音でびくっとする」「親から離れなくなった」「夜泣きが多くなった」などの場合は相談をすすめていました。

B　言語聴覚士も2人体制で入っているので、言葉の遅れがある子は言語聴覚士が、ある程度また詳しく言語の相談をしたりしています。

A　それは、全国的にも珍しいことなんです。言語聴覚士が健診の場に配置されて、個別相談をその場で受けられる体制は。

B　仮設住宅で隣近所を気にして、子どもが走らないように怒ることが多かったりとか、あとは、子どもをおとなしくさせるためにお菓子ばっかりずっとやっているとか。

A　あと、ゲームですね。

B　ゲームとお菓子と怒ることばっかりやっているという。何かお母さんの気持ちが落ち着かなくて、子どもの相手になって一緒に遊んだりとか、そういうのが何かどうなのかなって思うよね。

A　子育てを楽しんでいるお母さんが少ないと思います。ここで子育てしていると、お母さんは責められている気持ちがするからです。「あなた、避難しなくていいの?」と見ず知らずの人に声をかけられたり、子どもを抱っこして歩いていると、「わあ、珍しい」という感じで高齢者の方とかが寄ってこられてたり。子どもが珍しいという状態になっていま

す。

A　だから、なるべく子どもを連れて外出したくないという。「何でそこに子どもたちがいるんだ」と言われるって。除染もしたし、たまに公園も連れていってみたいけど、そういうふうに言われたからなるべく連れていかないようにしているとか。

3）住民の苛立ち

B　義援金は大変ですね。1世帯いくらという基準なので、そうすると、同じ世帯におじいちゃん夫婦と息子夫婦があると、それで1世帯なんですが、「何でそれがそうなんだ」みたいな感じで。住民票が一緒だとしても、別々の電気料金だったりとか、水道料金は別になっているとか、「生計は別に営んでいます」という証明をもらえればいいんですけれども。だから、もうあのときは電話を取るのが恐怖でしたよね。顔が見えないからすごいです。みんな暴言を吐かれて。住民の方たちの苛立ちは、何かすごかったですよ。通常の状態ではなかったので、仕方ないのかなと思うんですが。

4）残された要援護者への対応

B　介護保険施設については、特別養護老人ホームとかグループホームとかをやっている、ある大きい法人が、何かで発信したんですよね。そうしたら、関東辺りで受け入れてくれるところがあって、そこに移送したという経過があります。あとは、やっぱり職員がどんどん避難していって、職員が減っていって、食べ物がないとか、おむつがないとか、いろんなことがあって、自衛隊で避難したというところがあったようです。

施設にいる人はいいんですけれども、在宅にいる人だと、ヘルパー事業所だったり訪問看護事業所の方も撤退していなくなったので、残された人たちが本当に大変でしたね。訪問看護事業所から、「いや、残してきた誰々さんが心配になって。見に行ってください」とか。

障害者の場合だと通所もあって、あとは、入所施設は鴨川の東洋学園の系列が。その原町学園系列の児童デイサービス、今年から児童発達支援の療育期間は結構早くから再開してくれました。

男性　そうすると、やっぱり福祉施設というのは、できるだけ早急に開設してもらって、そこのサポートをしてもらうというのがすごく大事……。

B　大事だと思います。

A　幼稚園や保育園が再開してくれてよかったですよね。子どもが子どもらしくいられるところを再開してもらえたというのは。

B　ただ、療育機関の方がおっしゃっていたのは、そこに通っていたのは自閉症のお子さんが多いんですけれども、避難先でとってもよくしてもらって、声をかけてもらったりとかいろいろしてもらって、皆さんに手厚くしてもらったので、みんなよくなって帰ってきたということです。

B　そう。「いい感じで帰ってきたんですよ」なんて。
A　そういう方もいますね。この地域より福祉サービスが充実したところに避難した方は「こちらのほうが生活しやすいです」ということを言いますね。
B　震災後、自閉傾向のお子さんのお母さんにお会いしました。診断は受けていないんですが。「大丈夫だった?」と聞いたら、「何が?」と言われて、「ああ、そうか」と。だから、意外と自閉的な部分が幸いするところも。想像力がないところで、あまり心配もなかったということもありました。

5）福祉避難所の検討

B　そうですね。今、自立支援協議会で災害対策部会というのができたんですよ。「福祉避難所の在り方」というのをちょっと検討しているところで。
A　震災直後は、どなたでも「どうぞ」みたいな感じで受け入れました。しかし、精神疾患の方は大部屋より個室が落ち着くとか、お子さん連れの方、特に乳児期で夜間授乳があるような家族はこちらの和室の部屋とかというように、部屋割りが必然となっていきました。
A　避難所での生活は、お互いに交流しないとやっていけないですね。部屋やトイレなどが共同になるわけなので、みんなが気持ちよく生活するためには……生活している皆さんが、1日の中で「じゃあ、今の時間は掃除をする時間にしましょう」とか、そういう声かけをしたり、食事の配給の時はこうしましょう等、何となくルールができてきて「じゃあ、こういうふうにする時は、みんなで協力し合いましょう」とか。
　体が不自由な高齢者の方もいましたので、車椅子の方には「じゃあ、私がその食事を持っていってあげますよ」とか、そういう助け合う関係もだんだんと生まれてきました。
B　今回、やっぱり自閉症の人なんかは、結局、車中で過ごした方とか……。やっぱり、自閉症の子どもだと、体育館は走るもんだという学習があるから、走っちゃって怒られて大変な思いをしたんだけど、おんなじ障害を持つ人だったら、それはお互いに……。
　わかり合えて遠慮もなくというような話も聞いていたので、そういったかたちがいいのかな、なんて。
A　福祉避難所があれば良かったと思います。そこがそういう避難所だってわかると、物資の分配の時にも効果的にできたと思うし……。
　結構、大変でしたよね。分配するのに、どこにどういう需要があるのかって、人数はわかるけど、大人なのか子どもなのか、赤ちゃんなのかがわからないというのはありました。
質問者　そうですね。あれは、属性が書いてないのはだめですよね。
A　うん。もう、とりあえず名前だけ。安否確認が優先されていたので、とにかく名前だけは確実に控えて……という感じでした。
　何がどのぐらい……。食べ物はまだいいですけど、それ以外の日用品とかは、女性特有に使うもの、子ども特有に使うものが欲しいところに届かなくて、いっぱい余っていると